

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00530

研究課題名(和文) 語りの生成と変容のダイナミズムに関する認知語用論的研究

研究課題名(英文) A Cognitive Pragmatic Study on the Dynamism of Generation and Transformation of Narrative

研究代表者

仲本 康一郎 (Nakamoto, Koichiro)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：80528935

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日常的な営為によって生み出される語りと、語りが生じる世界に一貫性を求める私たちの心の習慣をナラティブ・リアリティとしてとらえ、人が語ることでいかにしてリアリティを構築しているかを認知語用論の観点から考察した。具体的には、(1) 私たちは外界の出来事に付随する心的体験を意図や感情、動機といった心の概念を通して語り、(2) 私たちは語りを構造化する物語標識を用いて有意義な物語を生成し、さらに他者との相互行為によって語りを変容させていくこと、(3) 私たちは語りの視点を動かすことで相互行為という場の内と外にいる参加者の関係性を柔軟に変容させていくことを、具体的な言語事例を通して解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来までのナラティブ研究が、社会的な権力構造やアイデンティティの変容、ジェンダー構築など、社会言語学的な関心に傾いていたのに対し、本研究では、語りによって生み出される意味の創出そのものに着目し、物語を生み出す人々の語りがいかなる心のメカニズムによって動的に生み出されているのか、さらにそれらが相互行為を通してどのように多様な物語へと変容していくのかを、認知語用論の観点から考察した。本研究の成果は、言語学におけるナラティブ研究の可能性を広げるだけでなく、今後、他の関連分野の研究者が自身のフィールドで語りを分析するときの精緻な記述手法となることも期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project is to investigate from the cognitive pragmatic perspective how people construct realities in narrative by telling stories. When we tell stories to others in everyday life, we seek coherency between narratives and the world created by them. In this study we called this habit of mind "narrative reality" and examined its major aspects focusing on the following three points: (1) we express our mental experience in our everyday life through concepts of mind such as emotion, intention, motive and so on; (2) we organize the structure of stories with narrative markers, which give the coherency in those stories and reorganize them into other stories in the process of interacting with others; (3) we flexibly change our social identity and social distance in the relationship between conversation participants as well as in the relationship with people outside of the conversation by shifting narrative viewpoints to those other than the speakers' own.

研究分野：認知言語学

キーワード：物語標識 メタファー 相互行為 オープン・コミュニケーション ナラティブ・リアリティ

1. 研究開始当初の背景

人は日常とは異なる出来事に直面するとき、物語を紡ぐことによって状況を理解しようとする。またそのさい、人は内省を繰り返したり、他者と語り合ったりするなかで、物語を不断に変容させていく。以上のような前提に立ち、本研究では、私たちは「語り」において「物語」を生成し変容させるというダイナミズムの観点に立ち、物語がどのように一貫性を保持し、語りの参与者にとってリアリティを構成していくのか考察することとした。

こうしたナラティブに注目した研究は、近年、心理学、教育学、社会学、人類学、医療・看護学など、多くの分野で質的研究として広がりを見せており、物語的転回(ナラティブ・ターン)と称される研究の潮流を生み出している。言語学においても Labov の体験談の分析 [引用文献 1, 2] を嚆矢とし、現在はおもに会話分析の観点から、語りを本来的に他者とのインタラクションにおいて生じる出来事とみなす相互行為分析が行なわれている [引用文献 3, 4]

しかし、現在までのナラティブ研究は、語りを社会現象とみなし、言語にあらわれた権力構造やジェンダー構築といった観点からの内容分析に偏っていたと言える [引用文献 5, 6, 7]。こうした従来までの研究の偏重傾向への反省を込め、本研究では、語りによって生み出される意味創出そのものを対象とし、認知言語学の研究手法から、私たちがどのようにして意味ある物語を生成するのかを考察することとした。

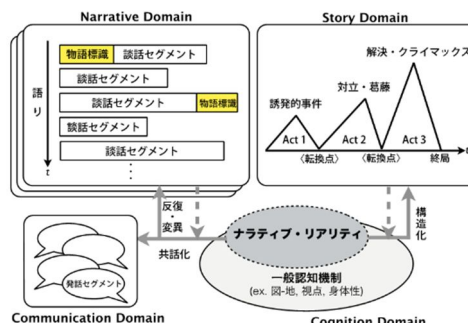
2. 研究の目的

(1) 語りの生成と変容

本研究では、どのような心のメカニズムによって物語が生成されるのか、そして反復や共話による変容のあとも維持される物語の一貫性とは何かについて認知語用論の観点から考察する。本研究の前提とするのは日常的な語りに終わりはないという主張である。語りは機械的な反復ではあり得ない。私たちは語るたびに、少しずつ内容を省略したり、別の話を挿入したり、強調点を変えたりして、語りのスタイルを変化させる。さらに、信念の更新による再解釈、他者による対話的な介入、反復的な語りの影響など、さまざまな要因によって語りは変容し得る。同じ出来事にも異なる意味が付与され、新たな枠組みによって全体が再構築されていく。

(2) ナラティブ・リアリティ

本研究では、実際の語りの現実を反省し、その生成と変容の過程を丹念に分析することで、語りの場において創出され、編集されるナラティブ・リアリティの変容を解明する。ナラティブ・リアリティとは、実際に表出される「語り」と物語の間を媒介し、物語に統一的なリアリティを与える認知的な構造体をさす。そのような構造を想定することで、人は語りによってどのように自らの経験を意味あるストーリーとして編集するのか、またそれを他者が納得できる共有された物語としてどう再構成するのかという創造的な意味構築のプロセスを検証することができる。



(3) 具体的な研究の方向性

本研究では、主体による概念化のプロセスが言語に反映されるという認知言語学の言語観、さらに出来事は語ることによって意味づけられるという社会構成主義の認知観という二つの観点を統合し、私たちが本来的には意味を持たない出来事に主体的に意味を与え、語りを動的に変容させていくプロセスを解明する。具体的には、(i) 語りの変容を捉える指標としての物語標識に注目した物語の意味変容プロセスの解明、(ii) 語りにおける包除性に着目した語りの視点が動的に場の内と外の参与者の関係性を変容させる認知機制の解明、(iii) 物語生成の骨子となる物語要素とそこからの物語生成プロセスの解明に認知語用論のアプローチで取り組む。

3. 研究の方法

(1) 物語の展開に関する認知語用論的分析

代表者仲本は、「語り」の展開を標示する「物語標識」に着目し、その背後で働く認知的営みを分析することで、物語がどのような心のメカニズムによって生み出されるかを考察する。具体的には、「やっと」「とうとう」「結局」といった時間的展開を表わす時間標識、「つい」「あやうく」「せっかく」といった主体の意図に関する意図標識に注目し、これらの表現を支える認知機制を「心の理論」に位置づけることで解明する。本研究では、このよう物語標識によって明示化される意味を「物語的意味」と呼び、その語用論的な記述の枠組みを提案する。そのさい重視するのは、出来事は語ることによって初めて意味づけられるという社会構成主義の観点である。次に、これらの理論的な考察から実証的な分析を企図し、国立国語研究所の大規模コーパスをもとに、物語標識を (i) 語り手が物語をどう提示するかを示す談話標識、(ii) 登場人物の行動や心の動きに言及する意図標識、(iii) 時間軸に沿った物語の展開構造を示す時間標識に分類し、それぞれの標識について具体的な語りの機能を解明することで語りの変容プロセスの実態を解

明する。

(2) 視点の移動に関する相互行為的分析

分担者岡本は、語りにおける「包除性」に着目し、語りの視点が動的に語りの場の内外の参与者の関係性を変容させる認知機制の解明に取り組む。これは、従来は類型論的な観点から各言語による語彙的区別の有無が論じられていた包除性を、語り手自身と受け手、第三者との関係性を操作する概念として発展させたもので、語り中出现する人称をカテゴリー化や定名詞句、不定代名詞等を駆使することで参与者の立場性を動的に変容させる言語ストラテジーを記述、説明する概念である。

研究内容	研究項目			研究年度		
	語りの生成過程	語りの変容過程	NRのモデル化	H30	H31	H32
仲本	物語的意味の構築過程の解明	●	●	←→		
	大規模コーパスに基づく物語標識の形態・機能分類		●		←→	
岡本	語りの包除性のモデル化	●	●	←→		
	共話変換実験の包除性分析		●		←→	
加藤	物語要素の抽出		●	←→		
	物語要約・意句の特徴分析	●	●		←→	

次に、包除性の概念をもとに日常会話から小説テキストに至る様々な談話資料を分析することで、モノログとしての語りにコミュニケーション的なダイナミズムが深く関与していることを明らかにする。最後に、「オープンコミュニケーション」の観点から、現行の研究課題から継続収録する共話変換データの包除性分析を行い、語りの視点を多視点化することによって浮き彫りになった受け手の潜在的な応答可能性を解明する。これにより、体験の有無によって生じる語りの視点の違いが、共話的語りとしてどのように融合され、受け手への共感を促すかを検証することができる。

分担者加藤は、諸般の事情により研究を中止することとなった。

4. 研究成果

(1) 物語標識 物語を構造化する装置

代表者仲本は、まず、物語を構造化する装置である物語標識の研究として、私たちが時間をどのように区切り、個々の出来事を物語として構造化するのかを考察した。私たちは現代社会において時間を意識することが多く、仕事の場面ではとりわけ時間の有効利用が必要とされる。そこで、本研究では、私たちが自らの仕事をふりかえるときの語りに注目し、仕事の場面で特徴的に用いられる表現を分析した。

具体的には、日々の仕事は《目標》《進捗》《時間》《労力》《成果》といったフレーム要素から構成され、これらによって仕事が評価される。本研究では、仕事の場面で用いられる時間標識として日本語のアスペクト表現に注目し、これらを1)開始相(例. さっそく、そろそろ) 2)進行相(例. どんどん、なかなか) 3)終結相(例. やっと、なんとか、結局)に分類し、フレーム意味論に基づきその意味、用法を分析した。

(2) メタファーを介した語りの研究

代表者仲本は、次に、英語のイディオム表現を対象として、人生の経験を概念化するメタファー表現を分析した。人生の体験は、物語標識を用いて出来事として語られるだけでなく、さまざまなメタファーを通して心的体験として語られる。これらのメタファー表現は、物語標識と異なり、心を出来事に付随する現象として語るのではなく、欲望、意志、感情といった心の概念を概念的に表わすという特徴がある。

本研究では、こうしたメタファー表現が、人生を語る「物語」として体系づけられることを主張した。例えば、人間関係のメタファーでは、keep in touch(連絡をとる)にはじまり、途中break up(決裂する)ことがあっても、最後はbuild bridges(仲直りする)といった具合に表現が構造化される。こうしたメタファーを通して、私たちは人生の経験を一貫性のある物語として構成するのである。

(3) ファジー意味論の総合的考察

代表者仲本は、最後に、本研究の背景となる研究としてファジー意味論に関する考察を行った。言語における漠然性/曖昧性は、これまでも多くの研究が行なわれてきたが、認知言語学の枠組みのなかで、言語がファジーであることの意義を包括的に考察したものは管見のかがり存在しない。本研究では、言語のあいまい性をコミュニケーション機能の観点から考察するとともに、それらがどのように概念化されるのかを認知言語学の観点から考察した。

具体的には、まず、日英語におけるファジー表現の広がりを概観し、認知意味論の観点からそこに見られる修辭的な用法を分析した。次に、それぞれの表現の持つ語用論的效果をポライトネス理論に照らし考察した。日常言語は科学的言明とは異なりそのすべてが曖昧性を備えていることを考慮すれば、本研究は今後語りを相互行為として分析するうえでの有益なリソースとして利用できるものと期待される。

(4) 語りを構成する言語表現の認知語用論分析

分担者岡本は、まず、語りを構成する多様な言語表現についての認知語用論分析を行った。はじめに、情報デザインの観点から、語りにおいて用いられる比喩表現であるメタファー・メトニミー・シネクドキについて再整理するとともに、語りの視点のデザインが基盤化の先取りによる引き込み、語りの視点を与える不定代名詞、語りの一貫性を媒介する視覚イメージの働き等について明らかにした。さらに、否定的直喩標識「じゃないけど(ではないが)」に着目することで、語りの中でアナロジーの否定的側面がどのように言語化されるのかを観察するとともに、そうした否定的側面がプロファイルされる基盤を実際の日常会話の談話シークエ

ンスの分析によって明らかにした。一方、ナラティブを生み出す「場」としてのソーシャルメディアにも着目し、新奇表現としての「Vて、どうぞ」表現がTwitterという特定のソーシャルメディア内で定着するなかで、従来は区別されていた「どうぞ」と「どうか」の使用域が当該表現においては統合されるようになったことを明らかにし、その理由をTwitterが持つ独話志向性が「投擲的発話」[引用文献 8]との共通性を有することに求めた。いずれの分析結果においても、その背景には、談話における話し手と聞き手の共有基盤化プロセスが大きく関わっていると考えられる。

(5) 語りを支える相互行為的側面の考察

分担者岡本は、次に、語りを支える相互行為的側面について、自身が提案するオープンコミュニケーション概念を軸に考察を進めた。まず、語りにおいてしばしば明示的・非明示的に行われる聞き手のツッコミ行動を漫才対話におけるツッコミの機能分類を通じて明らかにすることで、潜在的な応答可能性を通じて、語りがオープンコミュニケーションとして成立しうる相互行為性を有することを示唆した。さらに、講義中に実践した対話変換実験に基づく分析をもとに、仮想的相互行為がオープンコミュニケーションモデルによって相互行為と認知の2つのレベルで記述することが可能であることを示した。いずれの分析においても、独話としての語りが潜在的には相互行為として捉えられるポテンシャルを有することが導かれた。

(6) フィクションにおける相互行為の語られ方の分析

分担者岡本は、最後に、物語の作者がどのように相互行為としての会話をひとつのナラティブとして表現するかに焦点を当てた研究を行った。具体的には、日本の現代小説を複数取り上げ、小説内で行われる架空の登場人物たちの相互行為がどのように線状的に表現されるかについて明らかにするため、小説内の登場人物たちの会話場面から台詞とその前後の地の文を抽出し、登場人物たちの発話と行動・様子の描写などの配列パターンを調査した。その結果、小説内では視点人物による対話相手についての発話や行動・様子などの描写が多いことや、発話後に行動・様子などの描写が地の文に描かれることがわかった。このことから、作者によるナラティブとして小説を捉えると、作者が他者の相互行為を主観的に認知しつつも、読者の理解可能性を高める表現上の工夫を行っていると考えられ、今後の日常会話における語りの構造を解き明かす上で大きな示唆が得られた。

<引用文献>

- [1] Labov, W. & J. Waletzky. 1967. Narrative analysis. In: J. Helm (ed.), *Essays on the Verbal and Visual Arts*. Seattle: Univ. of Washington Press. 12-44.
- [2] Labov, W. 1972. The Transformation of Experience in Narrative Syntax. In: *Language in the Inner City*. in Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 354-396.
- [3] Schegloff, E. A. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- [4] Georgakopoulou, A. 2010. Narrative Analysis. In: R. Wodak, et al. (eds), *The SAGE Handbook of Sociolinguistics*. London: SAGE Publications
- [5] Ochs E. and L. Capps. 2001. *Living Narrative: Creating Lives in Everyday Storytelling*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- [6] Du Bois, J. 2007. Stance triangle. In: R. Englebretson (ed.), *Stancetaking in Discourse*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- [7] 佐藤彰・秦かおり (編). 2013. 『ナラティブ研究最前線 人は語ることで何をなすのか』東京: ひつじ書房.
- [8] 木村大治. 2003. 『共在感覚 アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都: 京都大学学術出版会.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 三瀬凧乃・岡本雅史	4. 巻 16
2. 論文標題 「Vて、どうぞ」 SNSにおける陳述副詞「どうぞ」の拡張的用法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語用論学会第23回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 81-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡本雅史	4. 巻 20
2. 論文標題 直喩標識としての「じゃないけど」 談話における直喩とアナロジーの再考に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 126-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 仲本康一郎	4. 巻 23
2. 論文標題 力のダイナミクスに基づく相互行為の概念分析ー心の葛藤をめぐってー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨大学国語・国文と国語教育	6. 最初と最後の頁 102-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 仲本康一郎	4. 巻 13
2. 論文標題 物語標識 語りを構造化する装置	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語用論学会第20回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 307-310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤祥	4. 巻 13
2. 論文標題 物語の反復に見る物語の可变的要素と根幹要素 物語を反復しても不変の要素；「ある物語」の特徴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語用論学会第20回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 311-314
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 本井佑衣・岡本雅史
2. 発表標題 対話のインタラクションリズムの変化とフロアの対称性の関係 日常対話と漫才対話の比較から
3. 学会等名 日本認知科学会第38回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤有梨・岡本雅史
2. 発表標題 ドラマ内相互行為に現れる非流暢性要素の特徴 日常会話との比較から
3. 学会等名 社会言語科学会第46回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金田智子・仲本康一郎・鎌田美千子
2. 発表標題 教師教育の課題と可能性 外国人児童生徒等教育を担う教員の養成と研修に焦点を当てて
3. 学会等名 日本語教育学会春季大会パネルセッション
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三瀬凧乃・岡本雅史
2. 発表標題 「Vて、どうぞ」 SNSにおける陳述副詞「どうぞ」の拡張的用法
3. 学会等名 日本語用論学会第23回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sachi Kato and Masashi Okamoto
2. 発表標題 Narrative recognition models: Accounting for narrative similarity for individual readers
3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (IPrA 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masashi Okamoto
2. 発表標題 Fictive interaction in prose text: An experiment on prose-to-dialogue conversion
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC-15) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本雅史
2. 発表標題 直喩標識としての「じゃないけど」 談話における直喩とアナロジーの再考に向けて
3. 学会等名 日本認知言語学会第20回全国大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤祥・浅原正幸
2. 発表標題 説明文の冒頭が説明対象の認識に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知科学会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本雅史
2. 発表標題 相互嵌入する対話と独話： 一人 で語り合い、 二人 で物語ることについて
3. 学会等名 京都言語学フォーラム第1回研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四宮彩夏・岡本雅史
2. 発表標題 小説における発話と行動の配列パターンからみる相互行為の表現手法
3. 学会等名 社会言語科学会第47回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 仲本康一郎
2. 発表標題 心の葛藤と言語表現 - 力動性をめぐって
3. 学会等名 京都言語学フォーラム第4回研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 谷村 緑、仲本 康一郎、Rebecca Calman	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 184
3. 書名 メタファーで読み解く英語のイディオム	

1. 著者名 児玉一宏、谷口一美、深田 智（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 はじめて学ぶ認知言語学	

1. 著者名 米倉よう子、山本 修、浅井良策（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448
3. 書名 ことばから心へ	

1. 著者名 池上嘉彦、山梨正明（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 420
3. 書名 認知言語学	

1. 著者名 辻 幸夫、楠見 孝、菅井三実、野村益寛、堀江 薫、吉村公宏（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 864
3. 書名 認知言語学大事典	

1. 著者名 田中克己、黒橋禎夫（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 共立出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 情報デザイン	

1. 著者名 村田和代（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 聞き手行動のコミュニケーション学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡本 雅史 (Okamoto Masashi) (30424310)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	加藤 祥 (Kato Sachi) (40623004)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・ コーパス開発センター・プロジェクト非常勤研究員 (62618)	諸般の事情により、本研究を中止することとなった。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------